

歴代教役者の思い出



寒川町にアパートを借りて

司祭 オーガスチン・西川正文

◎ はじめに

私が首里聖アンデレ教会でお世話になったのは、40年以上も前のこと。あれからは何度も転宅しており資料はまったくない。今から記す思い出は、全て私の記憶に基づくもの。その意味において多々間違いがあるかと思うがそれはお許しを願いたい。



◎ 沖縄聖公会に赴任

第二次世界大戦中に子どもながら戦争の悲惨さをいやというほど味わった私は、「平和を実現する人々は幸いである」との聖書の御言葉に出会っていらいこの御言葉は、私の脳裏から離れなくなった。聖職への道もこの御言葉に出会ったことによるものである。

或る日、神戸の教会で出会ったブラウニング司祭（当時）から、「沖縄に来ませんか」と誘われた。沖縄は第二次世界大戦中唯一の地上戦の行われた所。私はためらうことなく「はい」と返事した。沖縄聖公会（当時の呼称）に赴任したのは1967年1月。以来3年間にわたり沖縄で奉仕した。

◎ はじめての礼拝

沖縄に着いた次の日は主日であることから三原の教会に行った。1967年1月15日であった。礼拝後、数人の青年にとりかこまれ、「いつまでいるつもりか」と問われ、「2~3年」と答えた。「帰るつもりで来たのならここにいなくてもよい。すぐ帰りなさい。荷物運びは手伝います。私たちは生涯私たちとともにいてくれる先生を求めているのです。」これにはびっくりした。土地問題に複雑な理由があるのをしらなかったからである。いろいろと話しているうちに相互理解ができ、結局この青年たちは以後ずっと私の手足のごとくになって助けてくれた。

◎ 教会の土地問題

私が司牧した首里聖アンデレ教会は、私が着任する何年か前は一民家を借りて伝道活動をしていた。その活動は語りぐさになっている程盛んであった。活動が盛んになるにつれて「自分たちの教会がほしい」との思いがたかまり、あちこちで土地を物色。その中から今の土地にきまったく。しかし、使用できるまでには多くの困難があった。特に、居住権を主張するその土地に住む人たちとの間に訴訟問題が起こり、最終的には双方で裁判所の和解提案を受け入れ、問題は解決した。起工式をすませ建築がはじまった頃私は神戸に帰任した。

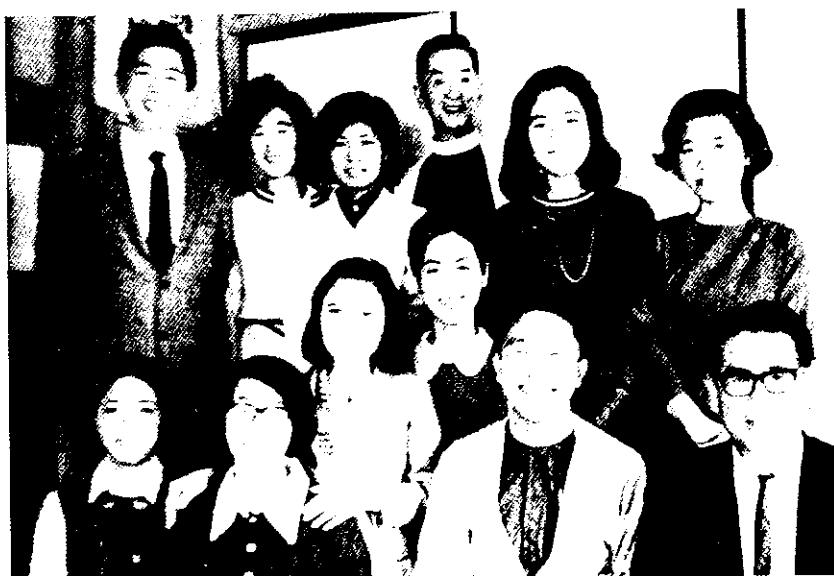
◎ 私の教会生活

教会の建物がない私は寒川町にアパートを借りて、そこで伝道活動を開始した。活動には二つあり、一つは土地問題で閉鎖中、散り散りになった信徒の呼び戻し、もう一つは琉大カンタベリークラブと沖大CSA（いずれもキリスト者学生の活動サークル）でのチャプレン的奉仕であった。CSAとは学内礼拝しか関わっていなかったが、カンタベリークラブのメンバーとは、現役の学生には週一回の聖書勉強会以外に、OBと一緒に、キャンプに、勤労奉仕にと、さまざまな活動をした。

カンタベリークラブとホノルル聖公会、立大との合同ワークキャンプが開催されたのは1967年8月。この時のワークは宮古島聖ヤコブ教会建築であった。こまかいことは忘れてしまったが、立大からのキャンペーの人一人、鈴木育三兄（当時）が礼拝堂の屋根に十字架が掲げられた時にすぐそばまでかけのぼり、祈りをささげていた姿。夜の交歓会でのブラウニング司祭の女装と見事なフラダンスは今でも私のまぶたに焼きついている。

◎ おしまいに

宣教開始50年を経過する間、常にお守りくださった主と、それにささえられての諸兄姉のお働きに感謝の思いでいっぱい。あわせて今後の首里聖アンデレ教会の発展を心から祈る次第である。



牧会生活の肥やしとなつた三年

司祭 ミカエル・岡崎 正

首里聖アンデレ教会50周年記念および教会献堂聖別40年記念おめでとうございます。首里聖アンデレ教会の「50周年記念誌」を発行するので、原稿を書くようにとの依頼を受け、もうそんなになるのかと、時の流れの速さに驚き、感慨を深めています。思い出すままに書き綴ってみます。

私が沖縄教区で勤務したのは、1969年4月から1972年3月までの3年間でした。沖縄赴任の第一夜は、当時首里の宣教牧会に従事されていた西川正文司祭の住む首里のアパートでした。その頃はまだ首里に教会の建物はなく、アパートの2住居を借りて、一つを礼拝と教会活動に、他を司祭宅に使っていました。その一室に10日間ほど、神戸からの荷物が届き、那覇市泊のアパートに移るまで、一家4人が居候させてもらいました。

沖縄教区での最初の年は、牧港にあった沖縄教区教務所の勤務と三原聖ペテロ聖パウロ教会の留守番役でした。当時の三原の教会の主管牧師は仲村実明司祭でしたが、彼が1年間の米国留学に行かれるので、その留守の間、ブラウニング主教が管理牧師となり、私がその手伝いと言うことでした。この期間は非常に忙しく、沖縄の風俗習慣や言葉に戸惑いながら、英語と日本語の飛び交うなかでの教区教務所の仕事の習得、三原の教会の礼拝奉仕、諸行事・集会などの指導、ナザレ幼稚園の園長代理などなど、目の回るような毎日でした。

翌1970年2月下旬に、西川司祭が神戸教区に帰任されたので、その後任として、私が首里聖アンデレ教会牧師に着任しました。その頃の首里聖アンデレ教会は、長年の懸案であった土地問題がやっと解決し、待望の教会建築が進められていました。教会の建物は約80%ほど出来上っていましたが、内装部分がまだ多く残されていました。教会の設計から施工まで苦労を重ねてこられた西川司祭にとって、その完成を見ないで、沖縄を離れて行くことは、さぞ心残りであったろうと思います。首里の地に教会を建てるとの望みは、長い間の願いでもあり、特に琉球大学のカンタベリー・クラブで活躍された人たちにとっては大きな希望で、大勢の皆様の協力と期待が寄せられていました。それだけに、何としても無事に、立派に完成させなければなりませんでした。突貫工事で行ったと記憶しています。

首里聖アンデレ教会献堂聖別式は、1970年5月5日、好天に恵まれ、主教エドモンド L. ブラウニング師父の司式により、大勢の出席者の祝福と喜びの内



に挙行されました。建物は、鉄筋コンクリートの二階建で、一階が礼拝堂、二階に学生センターと司祭住居という構造でした。学生センターは一室だけですが、専用トイレがあり、宿泊も出来るようになっていました。屋根は四つの波型になっており、屋根裏の空間が広く、それによって断熱効果があり、夏でも涼しく助かりました。

1970年は、まだ学生運動が盛んに行われており、琉球大学の学生と警官との衝突や乱闘が、守礼の門の下、首里聖アンデレ教会のすぐ前の道で幾度となく行われていたのを目撃しました。まだ学生たちの勢いが残っていたのでしょうか、学生運動家だけではなく、教会青年たちも沖縄の内外から学生センターを利用する人が多く訪れてきました。当時は、琉球大学が移転する前で、学生センターは大学の門前と言う絶好の地の利を得ていました。

1970年から1972年にかけては、沖縄の内外の教会情勢、社会・政治状況が大きく変動した時で、70年7月の万国博覧会とキリスト教館、10月には神戸教区主教・聖公会首座主教八代斌助師父の逝去、71年には、1月の日本聖公会沖縄セミナーの開催、5月にブラウニング主教のヨーロッパ教区主教への転任、沖縄の施政権返還協定調印、ニクソン大統領によるドル・ショックと為替自由変動制などがありました。このような流動する政治や社会の中にあって、沖縄聖公会は、アメリカの施政権返還に先立って、アメリカ聖公会から日本聖公会に移管されることになりました。そして、1972年1月6日顕現日に、日本聖公会沖縄教区誕生感謝礼拝が三原聖ペテロ聖パウロ主教座聖堂で行われました。その後、沖縄教区第一回教区会や教区主教選挙などが相次いで行われ、あわただしい日々でしたが、首里聖アンデレ教会も新しい教区体制のための教会整備を行いながら、信徒の皆様による教会生活と信仰生活の充実を進めていきました。

1972年4月、私は3年間の任期を終え、池原貞雄司祭に後任を託して、神戸教区へ帰任しました。私のパスポートには、一男一女（守と礼子）が書き加えられており、家族は6人になっていました。沖縄の日本復帰は5月で、私の引越はそれ



以前だったため、パスポートの書き替え、米ドルの交換、厄介な通関手続きなどがまだ必要でした。

沖縄での生活は、大変忙しく、厳しいものでしたが、その後の私の宣教・牧会生活、信仰生活、社会生活などに多くの良い影響を与えてくれました。違った文化や習慣などから教えられることが多くありましたし、アメリカ聖公会の制度や規則や考えなどを学ぶことが出来ました。沖縄で吸収した多くのことが、その後の生活のいろいろな面に非常に役立っています。沖縄在任は私の35歳から38歳にかけてで、いわゆる働き盛りで元気な時であり、少しの無理や無茶も苦にならず、がむしゃらに働き、動き回ることが出来たからだと思っています。それらのことが肥やしとなり、定年退職して75歳になった今も、神戸教区事務所で働くことが出来ているのではないかと考えています。神様の守りと導きの賜物を感謝しています。

首里聖アンデレ教会の働きと発展の上に、神様の変わらない祝福とお導きが豊かにありますように心からお祈りいたします。

注：1970年に献堂聖別された首里聖アンデレ教会の建物は、その後、首里城建設にともなう景観と道路拡張などにより、1994年に建てかえられました。



琉球王朝の敷地、首里の地

司祭 トマス・池原貞雄



日本聖公会沖縄教区首里聖アンデレ教会創立50周年を記念してお祝い申し上げます。首里聖アンデレ教会の敷地を玉陵（ウドゥン）に決定した聖公会側と、文化財保護の立場からでしたでしょうか反対者の皆さんとの小競り合いで、車を引き止めようとしたハイオー司祭さんが車に曳きずられるという光景を、思い出すたびにぞっとなります。

わたしが最初に司祭として勤務したのが島袋諸聖徒教会でした。この教会で、崎浜さんの友人で空手の達人の喜納昌伸先生が信徒でした。首里の空手本部から師範の免許を戴いていることを知って、教会で教室を開いてくださるように二人でお願いに行きました。「私の空手は、伊是名出身の首里城の尚巴志王に仕えた喜納家の先祖が300名の中の冊封使の一人から秘密裡に伝授されたもので他人に教えることは出来ない。今は弟と息子だけにしか伝えていない」と言われ、その後何回か式合泡盛を提げてお願いしましたが、最後に崎浜さんの一言「青少年健全育成のために」で、保育園で夜の空手道場が青少年のために何百年か後に、空手道が一般の前に日の目を見ることが実現しました。

わたしの3回目の勤務先は現在の土地に建てられた首里聖アンデレ教会で、前任の西川正文司祭と岡崎正司祭の後でした。立派な先生方の後をしっかりと受け継ぐと決心しました。信徒の川平朝甫さんは、昔の琉球時代に一王国扱いを受けた中国から平和主義と人類愛を充分に体得した先祖たちの後継者として教会活動を通してその精神を復活させましょうとおっしゃいました。

教会勤務を始めた頃から、わたしが口にする話題は、島袋諸聖徒教会の時の課題でした。わたしが教区の宣教部長のとき各教会から頂いた代祷題目の代祷集中で、島袋の第一は「日本復帰が早からんことを」、第二は「キリストの愛に溢れた養老院が与えられますように」がありました。第三以下は忘れましたけれども、第二の件で、首里の教会委員の皆さんに多くの時間と淨財をお願いする結果となりました。

その発端は、皆さんの代祷の結果が出はじめたからです。愛の村の地主である仲村節子さんがガンを患い、たまたま米国から帰り1年間教務所勤めをしている時でしたので、おんぶして東京の病院にお連れすることが出来ました。彼女は信徒ではなかったのですが、一人娘の仲村由梨さんは夕方に牧師館に来られ牧師夫人は付き切りで夜遅くお送りすると言うことが度々で、主日礼拝にはめったに出ない信徒

でしたが、島袋の新城司祭にわたしは無礼にも相談なしでした。その旅行の行き帰りに、民生委員をしていた節子さんは「寝たきり老人の惨状」を訴え続けていました。その時、教会の代祷の話をしますと、用地についてはあなたの名義で託すと仰いました。皆さんのお代祷の効果が出たと感謝しました。



という訳で、首里聖アンデレ教会の皆さんに心労をお掛けする結果となりましたことを申し訳なく思っています。当教会の石川盛子姉は首里から遠い愛の村まで長い間、お花のご奉仕を続けられました。

首里は、伊是名村字諸見ご出身の第二尚王、金丸、尚円王の活躍された聖域です。伊是名小学校の校歌で歌った王様達は、人々の豊かな生活と人々の愛の交わりと平和を願い実践されました。当時誰もが肖りたいと思っていました。

仲村司祭さんが病床洗礼をお授けくださった伊是名村前村長・伊禮徹兄は、当教会員の山川宗雄兄の夫人美津姉のご尊父です。伊禮村長さんは、当時、村で2台しかなかったと言われた、ラジオに流れる中山吾一司祭の福音放送を聞かれ「敗戦で打ちひしがれた村民を奮い立たせるために、この島に教会を誘致しよう」と決意され、辿りたどってラジオ牧師に会い、ヘフナー管理司祭と交渉して、村に『伊是名聖靈教会』建立・聖別にやっと至りました。最初の建築費全額盜難もあり、犯人は小学校の教師でした。

最初の牧師は、八代斌助総裁主教に要請したところ東京聖アンデレ教会の主任牧師であった野瀬秀敏司祭が志願して着任。野瀬司祭は半年で栄養失調で帰ることとなりましたが、その後、ゴッドフリー司祭によって、洗礼を受けた人たちの中に、山川美津姉、・・・そしてわたしも末席を賑すこととなりました。

教会と守礼の門の間にあるスヌファンウタキで尚円王は生まれた伊是名島に向かって祈っていたといわれます。首里の聖アンデレ教会から『伊是名聖靈教会の復元』を祈ることはみ摂理ではないかと感じています。賛成の方はお祈りお願いたします。

首里の地に、殊に琉球王朝の敷地に聖公会の聖堂が建つというニュースは、古都の人々にはどう思われたか知りませんが、少なくとも聖公会員にとっては琉球の中心にイエス様がお立ちになられるという莊厳な雰囲気に包まれたように思い

ました。

あの最大な国・中国が小さなサバニー（20トン少々の帆掛け船）で乗り込んだ琉球魂に対して、快くお付き合い頂き、今更ながら、懐の深さに感動します。なんと一国扱いで、琉球王国として、属国として進貢船が運ぶ貢物を実際より遙かに高く値積もり、帰りは高価な中国産の品々を山ほど積んで帰り、昔の朝鮮も他の支配下の国々も次第に裕福に成って行ったことあります。

どんな荒波にも耐えうるサバニー・グワア（小）を創り出した造船の技術は、琉球新報に、崎浜秀松兄が掘り当てた宝石のような記事で明らかになったように、難破した英國商船員の北谷町民による救助物語で実証されました。乗組員67名が改造された「琉球丸」で無事帰国し、返礼にキリストの福音を携えてベッテルハイム伝道師が送られてきたとの事ですが、助けられた北谷ではなく「波の上」だったので何年間も軟禁状態でその目的は果たせなかったのは残念です。

このように平和を愛し実践する沖縄県民の心を無視して、米国は軍事基地を引き上げようとはしない。中国・明の国の傘下で愛と平和の有り難さを体験した琉球王国であります。第二次世界大戦では、日本本土に攻撃が及ぶのを遅らせるために、一日でも長く沖縄で長引かせるようにという悲しい現実がありました。薩摩イモのお陰で餓死を逃れたのでイモは好きだけど薩摩は嫌いです。

米軍は、沖縄の基地は、中国を含む国々に向けた基地という想定で最重要視している。人類愛と平和主義を植え込んでくれた中国に向けられる大砲を沖縄に据えるということは4、500年間続いた中国の琉球王国も昔の朝鮮も無視した勝手な行動であります。薩摩と同じで搾取、悪用の連続である。川平朝申先生は首里の丘に平和の殿堂・首里聖アンデレ教会が建立されたことを、殊の外よろこばれることであります。

首里城の真ん前に建てられた首里聖アンデレ教会の使命は偉大であります。私



たちは米国ではなく米国聖公会と昔の中国の明の愛に感謝し受け継ぎましょう。首里聖アンデレ教会のこれから50年間も過ぎる50年以上に祝福されますように、皆様が神様と人々のために祈り感謝をお続け下さいますようにお願い致します。首里聖アンデレ教会創立50周年記念おめでとうございます。

神の畠、神の建物

司祭 ペテロ・新城 喬

首里聖アンデレ教会創立50周年おめでとうございます。

1984年4月、御教会へ赴任してから、2002年3月に定年退職するまでの18年間、首里聖アンデレで牧会勤務する事が出来ましたことは、私にとって大変恵まれた、そして楽しい時がありました。

戦後の教会では珍しく、教区でも恵まれた環境は、庭の2本のガジマルと、それにマッチした教会の建物。首里城と云う沖縄観光名所の入口に面した教会。それは沖縄訪問者の目にも止まる静かな祈りの場でした。

赴任当初の主日礼拝は4、5人で、わが家族3人を加えても10名足らずで、一日も早く礼拝出席者が増加するよう祈る毎日でした。しかし、そのうちの3人の女性信徒は、礼拝出席だけでなく、毎週土曜日仕事を終えてから交替で、礼拝堂の掃除、献花準備、そして一人の信徒は、毎朝6時半頃から庭の落葉の片付けもしていて、このような信徒によって、教会は目立たない所で支えられているのだと感じ、信徒の数よりもこのような信徒がいることが、教会を支えているのだと思い知らされました。

2ヶ月も経たないうちに、首里在住の三原教会、諸聖徒教会の信徒や、訪問呼びかけて出席するようになった信徒らが徐々に礼拝に出席するようになり、12名程に増えて行きました。そこで教区にお願いし、集会所として12坪のプレハブを建てることにしましたが、この建物は後に、隣のピアノ教室や英語クラスにも貸し出して喜ばれ、また教会の会計も潤すことになりました。

アンデレ寮など

1986年、運良く首里城近くに県立芸術大学が開校することになり、そこに通う県外の学生のための寮が必要になってくる事を聞き、教会委員会に計り、学生寮を作つて学生らに提供すると同時に、その収益で牧師給与負担金の一部に充当することを決め、教区に提案したが、当時の財政部長は「教会のような素人が、収益事業等をやると失敗するかも知れない」と、教区資金からの貸出しを拒まれ、止むなく教区の取引先の銀行に出向いて資金の借用を申し込みました。財政部長の立場も当然で、成功するか否かは不安で祈るしかありませんでした。

銀行は新築の建物を抵当に、20年の分割返済で、貸出しを承諾、教会としては収入の半分を銀行返済、残りの半分を負担金積立に充当する計画で工事に着工、1987年2月に落成式を迎えました。教区からは財政部長はじめ、多くの関係者



が出席して下さり、約80余でその完成を祝いました。

芸大でも寮の宣伝をして貰ったお陰で、すぐ満室、その後の入室も順調で、教区では利息の関係で、借入金返済の肩代わりをしても良いとのことで、数年後には銀行からの借入金を全額返済することになりました。聖書には「天の下の出来事にはすべて定められた時がある」（コヘレトの言葉3：1）とある通り、時は私達に神の知恵を知らせたと思います。

話は変わりますが、赴任間もない頃、首里地区の牧師朝祷会に誘われ、毎週土曜日早朝、超教派の牧師らの祈り、説教を聞くことが出来て良き交わりを続けるうちに、孤独になりがちな、或いは独善的な牧会の参考になりました。他教派の牧師同志が、沖縄地域に根ざした教会の、困難さや悩みを分ち合うことは、心の安らぎにもなり、特にそれぞれの教派を理解する良い機会でもありました。

また島さん夫妻を始め、沖縄勤務となって他教区から転入して來た聖公会の信徒らとの良き交わりも忘れることは出来ません。短期間づつではありましたが、教会に新しい息吹や、信仰の軌跡を残されて行かれたと思います。（例えばサーバー等も）

礼拝堂の建築

人の思いとは全く異なる神の計画が、私達の目の前に示されました。沖縄観光の目玉首里城。そこには毎日戦争を知らない若者たちも多く来ます。そして教会にも立ち寄ります。その首里城公園の整備事業に伴う道路拡張工事のため、教会敷地の一部買い上げが持ち上がったのです。

1991年1月、県は18坪の土地の買い上げと、建物の一部の取りこわしの必要を認めてほしい旨お願いに来ました。道路工事との関係もあるので、出来るだけ早急に結論を出してほしい。補償額は近く提示することがありました。教会では検討の結果、建物は一部ではなく全部補償してほしい。教会前のガジマルは景観上残すよう考慮してほしい旨を伝えて、最終的に提示された補償額を受け入れることにしました。

同年9月、常置委員会と教会建物の解体や新礼拝堂、牧師館の建築等について話し合い保証金の不足分を教区から補助して貰い、建築を始めことになり、設計図を何回も練り直して、現在のようになりました。





1994年1月に建物の解体式と起工式を行ない、リースしたプレハブを敷地の隅に建て、仮礼拝堂と倉庫として使用、司祭は大道のアパート暮らし。総建築費8500万円の内訳は、保証金5800万円、教区補助2500万円、自己資金と募金200万円で、聖堂、集会所、事務室、牧師館（教会60坪、牧師館34坪）が建ち、9月に献堂式を行なうことができました。

「主はご自分で計画されたことを、この地に実現された」(哀歌2:17)としか思えません。何故なら私には首里で教会を新築することなど考慮していませんでしたから。また礼拝堂建築中の7月、突然高良孝誠司祭が伊是名から、かつて伊是名聖霊教会で使用されていた重さ200キロ余りの釣鐘を運んで来て下さいました。

その鐘の簡単な由来を言えば、かつて東京教区の野瀬司祭（後主教）が、伊是名島で伝道されていた時、東京教区の信徒有志一同から寄贈されたもので、その後伊是名村の資料館で展示されていたものを、議会の承認を得て、譲り受けたものです。観光地の目立つ教会に釣るした方が良いのではと、自費で運搬して下さったものです。

また諸聖徒教会から中古ではあるが、現在手に入れることのできないストップオルガンを譲り受け、修理に出した所、このようなオルガンは今では100万円出しても手に入らない貴重なものですから大切に使って下さいと言われました。いづれ骨董品として教区で保管することを望みます（修理も無償に近い値でした）。

〔編集者注：このオルガンは、2006年に上映された、音楽家宮良長包を題材にした映画「えんどうの花」の中で小道具として貸し出されて使われています。〕

振り返って見ますと、18年の牧会は長いようでもあり（先達に比べれば）また短かったようでもあり、失敗ばかりの年月であったかも知れませんが、皆さんの寛容で目をつぶっていただき、大変感謝しております。お赦し下さい。これからのお主の導きと祝福をお祈り致します。

「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させて下さったのは神です。ですから大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。・・・あなたがたは神の畑、神の建物なのです。」

（コリントの信徒への手紙I、3：6、9）

大学生として、そして管理牧師として

司祭 ダビデ・上原榮正

首里聖アンデレ教会「宣教50年」、おめでとうございます。

首里聖アンデレ教会には、二つの大きな思い出があります。一つは青年時代のこと、もう一つは聖職になってからのことです。

最初に私が、首里聖アンデレ教会と関わりを持つようになったのは、まだ私が大学生の頃でした。首里聖アンデレ教会に教区の学生センターがあり、池原貞雄司祭が牧師をしておりました。日曜日の午後など、自分の教会で礼拝が終わってから、青年会の集まりで、首里聖アンデレ教会に行きますと、午後の遅い時間なのに多くの信徒がたむろ？していく、牧師もニコニコと大声を出して、愉快に話をしているのが印象的でした。ある人はオルガニストの仕事、ある人はオルガンを弾き、ある人はおしゃべりをし、ある人はぼんやりとただ座っているだけという、みんな夫々でしたが、教会にいるのが、ただ楽しくて、それを喜んでいるように感じました。

その頃、沖縄教区の青年会は箭野真理司祭（現在中部教区司祭）を中心に、なんとはなしに活動していたと思います。一つ一つの教会の青年の数は少なかつたと思うのですが、それでも教区全体で集まると、結構の数の青年たち（今では、立派なおじさんたち）がいたように思います。どんな話をしていたのかは、覚えていません。しかし、1970年半ばという時代的な背景もあったと思いますが、教会批判をしたり、あるいは人権に関わるようなことを、結構熱っぽく語っていたように思います。

その中でも一番大きな思い出は、青年会で石垣キリスト教会（当時：棚原恵正司祭が牧師）のペンキ塗りをさせていただいたことです。夏場の暑い中で、首里聖アンデレ教会からも2、3人の青年が参加し、わいわいと楽しく作業をしました。そして、帰りの船の中でも、満天の星を見ながら、いろんな話をしたことを思い出します。

それから、20年余、今度は管理牧師として聖アンデレ教会に関わりを持たせていただきました。当時とは建物も変わり、雰囲気もすっかり変わっていました。聖職、信徒の高齢化と減少という中で、どの教会も影響を受けていることを感じます。新城司祭の退職の後に、目崎甲式兄が聖職候補生として牧師館にお住みになり、教会のお世話をすることになりましたので、私が管理牧師として足掛け3年ほどやらせていただきました。その間いつも暖かくお迎えくださったことに感謝



しております。小さな集会室で、アットホームな感じで、教会委員会を開かせていただきました。そこに、何か首里聖アンデレ教会の教会らしさが出ていたように思います。小さな教会ですが、みんなが家族のように、暖かく、ぬくもりを感じる、そんな雰囲気が、また訪ねて来る人を和ませ、ホットさせる、やさしい教会、それが首里聖アンデレ教会のように思います。

首里城を多くの人々が観光で訪れると思いますが、首里聖アンデレ教会に足を踏み入れる人たちが、神様に触れ、ご臨在を感じることができる教会になったらと願っています。

元々首里聖アンデレ教会は、琉球大学が出来たので、学生達を中心としたカンタベリー・クラブから発展した教会です。主にある安寧と成長が豊かに与えられますように、お祈りしています。ちなみに、私と妻百子との婚約式は首里聖アンデレ教会でした。前の建物でしたが、今では、なつかしい良い思い出になっています。



観光客への奉仕を通して

司祭 アンセルム・日崎甲式

首里聖アンデレ教会設立50周年をお祝い申し上げます。

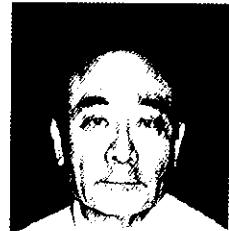
ここでは、若いときからの聖職者でなかった私の沖縄で与えられました人生・首里聖アンデレ教会との関わりにつきまして、述べさせていただきたいと思います。

私は“正義と平和”委員会に参加させていただき、その一員として沖縄教区の聖職者・信徒の皆様のご協力によりまして、「沖縄週間」の企画・実施に約10年間関わらせていただきました。この間、沖縄の歴史と現実の多くの学びの機会に触れ、会社を定年退職しましたのを機に沖縄に住んでみたいとの思いから、沖縄で働きながらと思いましたが、働く職場はないが聖職への道ならばと谷主教に誘われました。しかし、迷い、かなり逡巡しましたが不安を抱えつつ2001年1月に来島しました。

当時は教区事務所の勤務となり、夜は沖縄信徒聖書学校に学びつつ、翌年新城司祭の定年後の首里聖アンデレ教会に赴任し、上原司祭管理のもと教会運営に関わることとなりました。

当時は、信徒さんのお宅を訪問するにも、買い物に行くにも、用事があって出掛けるにも道を覚えるのに大変骨が折れました。更に、赴任しましたこの時期は丁度、建物等が補修を必要とする時期が来たのでしょうか。私の赴任を待っていたように、牧師館の台所の排水や雨漏りなどの補修、アンデレ寮の屋根や共同アンテナなどの修理や取替え、卒業して退寮した後の部屋の改装や洗浄・補修、毎

年の県立沖縄芸大への入寮者の募集申し込み、台風によって生じた一部屋根瓦の破損・ガジュマルの倒木の後処理、コピー機の買い替えなど教会委員会への提案、関係業者との交渉などが続いて生じてきました。また毎年の教会状況調査報告を通しての教勢把握、そして



申告されているデータの修正なども皆さんと共有したりしてきました。その他のこととは長くなりますので、思い出しましたことを少しづつ記します(順不同)。

宇夫方さんご夫妻、首里高校放送部の生徒たちと共にになった宮沢賢治などの詩の朗読会のこと。協働司祭として勤務されました成成鍾司祭と、この教会は沖縄の観光の中心地にありますので、地元の皆さんや観光客の方々への奉仕を通して宣教の拠点にしようと話し合ったこと。私の出張中、悩める男性が礼拝堂に来られたので、石原執事(当時)ご夫妻、妻の宗世が聞き、語りかけ、祈り、聖歌を歌い応対してくださり家に帰られたこと。「平和の礎」に夫の名が記されていることを知り、長野県から息子さんと共に教会に来られ私にそのことを話され、そして礎に向かわれた老婦人のこと。内地から来られた多くの信徒さんが、観光の途中立寄ってくださったり、初期の頃の牧師館を訪ねて来られ、その頃のことを話され見に行かれた女性のこと。通学の女子中学生たちが、放課後礼拝堂を見に立寄ったこと。町内会に入会したいと申し出ましたら受け入れられ、町内会の敬老会や沖縄戦の慰霊祭のご案内を頂き出席し、町内の方々と少しづつ知り合いになれましたこと。外出で不在の時、観光などで立寄ってくださり、礼拝堂でお祈りをされ、コメントと共に献金をしてくださった方々がおられましたこと。長野県から沖縄観光に一人で来られ、その女性の所属している教会の牧師さんとも知り合いでしたこともあり、昼食に趣味の沖縄そば屋に案内し共に食事をしたこと。司祭25年勤続の休暇で沖縄に来られ、立寄ってくださったり、礼拝に出席された方々がおられ、そのお一人が多くの信徒さんと共に再び沖縄の学びに来られたこと。沖縄週間に参加された内地の信徒さんと教会で信徒の方々と夕食、主日礼拝を共にしたこと。普天間にある米軍基地の辺野古への移転反対の座り込みに信徒の一人か二人の方と、また沖縄週間に参加された内地の信徒さんなどと共に参加したこと。日本基督教団の方のお誘いで、首里教会での他教派の方々との朝祷会に参加させていただき、祈りと学びを共にしたこと。沖縄全島新年朝祷会にも参加したこと。その他の超教派での祈祷会、ぎのわんセミナーハウスとの交流。台湾や伊江島などのアシュラム参加など得



難い体験をさせていただきましたこと・・・

開かれた教会はとても大切であることを、身をもって体験させていただきましたが、その思いの大切さ、人をお迎えすることの大切さの足らなさを痛感する日々でした。また教会全体でこの重要さを共有することが宣教に一層大切であることも感じました。

このような中で谷主教様や多くの司祭様のご指導で豊かな学びの機会に恵まれ、執事按手への道が与えられました。感謝いたします。更に、与えられました執事としての勤務の中で、谷主教様や司祭様方の計らいで司祭への学びの機会が与えられ、按手に与りましたことを感謝いたします。しかし、これらの道を振り返ってみると、生涯信徒という思いで信仰生活を歩んでまいりました私にとりましては、晴天の霹靂の出来事でした。沖縄教区での勤務を支え、協力してくださり、励ましの声をかけてくださった教区、また教会の信徒の方々ならびに谷主教様はじめ聖職の皆様には、この機会をお借りしまして、改めて感謝いたします。

沖縄教区のご発展及び首里聖アンデレ教会の宣教への力強い歩みをお祈り申し上げます。



思い出深い首里

司祭 モニカ・石原絹子



宣教50周年おめでとうございます。心からお喜び申しあげます。

50年前、この首里の地に、首里聖アンデレ教会が開始されましたことは、神の深い慈しみによるものと信じています。戦争の傷跡がまだ癒えず、心身傷ついたままの人々の心に福音の種が蒔かれたことは、神の民としての生きる喜び、生きる力となり、今日の首里聖アンデレ教会の礎となつたことでしょう。

私達家族が、首里聖アンデレ教会を初めて訪れたのは、35年前海洋博の帰りで、当時首里聖アンデレ教会を司牧しておられた池原司祭はじめご家族の皆さんにお会いするためでした。沖縄を離れて久しぶりの先生やご家族の皆さんとの再会を喜び、そして信徒の皆様がご馳走してくださった美味しいぜんざいは、旅の疲れを癒し、首里聖アンデレ教会の香りを満喫したものでした。本当に有り難うございました。

時は流れ、7年前帰郷がかない首里に住所を構えた私たち、夫は幼少のころから一中時代まで過ごした、思い出深い首里での生活を大変懐かしみ大切にしつつ、殊に首里聖アンデレ教会での信仰生活をこの上ない喜びとして日々感謝のうちに過ごさせていただきました。本当にありがとうございました。

又、私は短い期間でしたが執事として奉仕させていただいた恵みに感謝しています。私はこれまで、いくつかの教会で女性聖職として仕えて参りましたが、それぞれの教会の事情、課題などを体験し、学ぶ機会が与えられました。その間、多くの信徒の皆様と出会い、交わり、祈り、仕えることができましたことは誠に大きな恵みでございました。定年

退職をいたしましたが、これからも又、いろいろの出会いを楽しみに期待しつつ、主にある皆様方と共に、福音の広がりのため宣教に励んで参りたいと願っています。

御教会の御上に、皆様お一人ひとりの上に主の祝福をお祈り致します。

